

「僕は一体、誰のためにまんがを描いているのだろうか。このまま流れに任せて描き続けていいのだろうか。」
 大人でも子どもでも、「変身!」と聞けば、『仮面ライダー』を思い出す人が多いことでしょう。『仮面ライダー』は、石ノ森章太郎の描いた作品です。数々の作品を作り、「まんがの王様」と呼ばれた章太郎にも、仕事への迷いを抱える日々がありました。

石ノ森章太郎（本名・小野寺章太郎）は、昭和十三（一九三八）年、石森町（現在の登米市中田町）に、五人兄弟の長男として生まれました。子供のころは太平洋戦争の影響で物が手に入らず、子ども用の本などをなかなか買ってもらったことができませんでした。本が好きな章太郎は、父親の本棚にある本を片っ端から読みました。また、自分で絵を描き、「おもしろブック」と名づけた本を作った楽しみました。章太郎が九歳の時、「まんがの神様」と呼ばれる手塚治虫が『新宝島』というまんがの単行本を発表しました。それを読んだ章太郎は、映画のように今にも動き出しそうな絵の一つ一つに心を奪われ、まんがのすばらしさに夢中になり、自分でもまんがを描くようになりました。章太郎が描くまんがを、いつも誰よりも喜んでくれる一番の読者は、小さい頃から病弱だった三歳上の姉由恵でした。

中学生になると、『毎日中学生新聞』に四コマまんがを投稿して入選するようになり、毎月作品を送りました。章太郎に勉強をしてほしい両親は、まんがを描くことに大反対でしたが、章太郎はまんが雑誌にも投稿を始めました。宮城県沼沼高等学校に入ると、美術部や音楽部、新聞部、文学部、柔道部などをかけ持ちしながらまんがを描き、『墨汁一滴』という同人誌を発行し、出版社や手塚治虫へも送りました。このことがきっかけとなり、高校二年生の時には、手塚治虫からアシスタントを頼まれ、たびたび東京に行くようになりました。



幅広い年代に人気の『仮面ライダー』
 （株式会社石森プロ所蔵）

同じ年、手塚治虫の紹介で、『漫画少年』という雑誌へ章太郎の作品が掲載されることになりました。高校在学のまま、プロデビューを果たしたのです。デビューにあたり、ペンネームを出身の「石森」にちなみ、「石森章太郎」としましたが、誰にも正しく読んでもらえず、「石森章太郎」と呼ばれるようになりました。このころ、大学入学を目指して勉強をするように父親に何度も言われましたが、受験勉強をしないでまんがばかり描く日々が続きました。章太郎は、新聞記者や映画監督、小説家にもあこがれていましたので、まんがを続けながら生活費と学費を稼ぎ、それから大学を目指そうと考えていました。章太郎の姿勢を父母はよく思っています。ただ一人、姉だけが、「上手ねえ、章太郎、すごいわねえ。好きなことをするのが一番の幸せなのだから、章太郎がまんがを描きたいならそれが一番いいと思う。東京に行きなさいよ。」そう言って、章太郎の背中を押してくれました。



石ノ森章太郎の生家（登米市中田町）
 （石ノ森章太郎ふるさと記念館提供）

昭和三十一（一九五六）年、章太郎は上京し、「トキワ荘」というアパートに引っ越しました。「トキワ荘」には、まんが家の卵（「ドラえもん」の作者藤子・F・不二雄、「天才バカボン」の作者赤塚不二夫など）がたくさん住んでいました。章太郎のまんがを描くスピードはとても速く、他のまんが家の三、四倍の量の原稿を描くことができてきました。また、もともと好奇心旺盛でしたので、描く分野もとても幅の広いものでした。編集者からまんがの執筆を頼まれると断りきれず、いつも原稿の締切りに追われ、まんがを描くだけで精一杯の生活になり、間もなく大学受験をあきらめてしまいました。

章太郎は姉に病気の治療を勧めるため、東京に呼び寄せました。姉は、章太郎の良き理解者であり、いつも最初の読者でした。しかし、姉は上京して一年後、突然発作を起こして病院へ運ばれました。発作が収まり一時落ち着いていたため、章太郎は病院を後にしましたが、姉の容態は急変し、急いで病院に戻った時には、亡くなっていました。姉を一人ぼっちで死なせてしまったことを、章太郎は何年もの間後悔し、自分を責め続けました。

手塚治虫：日本のまんが家、アニメーター、ディレクター、医学博士。戦後日本においてストリーマンの第一人者として活躍した。主な作品に鉄腕アトム、「ジャングル大帝」、「火の鳥」などがある。

同人誌：目的などを同じくする人たちが作品発表の場として編集・発行する雑誌。

好奇心旺盛：珍しいことや未知の事がらに、興味関心を盛んに抱くさま。

姉の死後、心に大きく開いた穴を、仕事をすることで紛らわそうとしました。しかし、

(毎日締切りに追われてばかりだ。それも、何の努力もしないで、編集者に言われるまま描き流したようなものばかりが通用するとは。自分のしたかったことは、こんなことだったのだろうか。まんがを描くのは好きだ。でも、このままでは僕の人生はすっかりまんがに飲みこまれてしまうのでは……。)

もともと多くのことに興味をもっていった章太郎は、自問自答を繰り返すようになりました。

(ああ……、もう限界だ。まんがからきつぱり足を洗うことにしよう。)

章太郎は世界旅行に行くことを決心します。二十三歳のときでした。当時は海外旅行が自由にできず、観光のために出かけることは、ほぼ不可能でした。「記者」という肩書きで各出版社から旅行の資金を借り、帰ってきてから働いて返す約束で出発しました。アメリカ、イギリス、フランス、オーストリア、ドイツ(当時は西ドイツ)、オランダ、スペイン、イタリア、ギリシャ、エジプト、香港、マカオと約三か月の一人旅でした。初めての海外旅行に夢中になる一方、まんがのことは頭の中からまるっきり消えていきました。見るもの、聞くもの、すべてが章太郎に新鮮な感動を与え、日本での生活を思い出すこともありませんでした。

帰国して自分の部屋に戻ると、いつも使っていた机やペンなど、目に映るものが、何か前とは違う景色のように見えました。

(そういえば、三か月もまんがを描いていないんだなあ。姉さんが僕の作品を読んで喜んでくれればそれでいいと思っていたけれど、本当にそのために描いていたのだろうか。勉強から逃げ、親から逃げ、姉さんの苦しむ姿から逃げ、趣味から仕事に変わり、苦しくなってきたまんがから逃げ……。自分が本当にやりたいことは何だろう。自分のよさを生かす仕事とは、一体何なのだろう……。よし、どこまでできるか、やってみようじゃないか。)

章太郎は、ぐっとペンを握りしめ、『サイボーグ009』を描き始めます。九人のサイボーグはそれぞれ国籍や能力に特徴をもたせました。それは、旅行で立ち寄った国の影響を受けたものでした。サイボーグを主人公にしたのも、旅行中に読んでいた科学雑誌に掲載されていたからでした。旅行中はまんがのことを忘れていたはずでしたが、実は世界旅行は、作品作りに大きな影響を与えていました。『サイボーグ009』は、読者から予想を超える反響があり、様々な雑誌に連載されるようになりました。後に章太郎はこの作品を、自分の意思でまんがを選び、プロとして再

出発を果たした記念すべき最初の作品、と振り返っています。

様々なことに興味のあった章太郎の感性は、創り出すまんがの中で大いに発揮されます。章太郎が「まんがの王様」と呼ばれるようになったのは、多くのすばらしい作品を生み出したからです。シリアスなSF長編、どたばたギャグ、大人向けの時代もの、変身ヒーロー、日本の歴史など、様々なテーマに果敢に挑戦したその作品数は、世界一とギネス記録に認定されました。また、ずっと、ふるさとを大切に思い続

けた章太郎は、初心に戻る意味をこめ、四十八歳の時、ペンネームを生まれ故郷の地名である「いしのもり」と読んでもらえるように「石ノ森章太郎」に改名しました。そして、

「萬画は万画です。あらゆる事象を表現できるからです。」
という『萬画宣言』をし、その死の直前まで精力的に多くの作品を作りました。章太郎の作品は、亡くなった今も、世代を超えて愛され続けています。



石ノ森章太郎
(株式会社石森プロ所蔵)

石ノ森章太郎(本名・小野寺章太郎)

石ノ森章太郎は、昭和十三(一九三八)年、現在の登米市中田町石森に生まれた。高校二年生の時にプロのまんが家としてデビューし、生涯に描いたマンガのページ数は十二万八千枚、生み出された作品は七百七十作に及ぶ。登米市中田町には、「石ノ森章太郎ふるさと記念館」が、生前「第二のふるさと」と話していた石巻市には「石ノ森萬画館」が建てられ、全国各地から大勢の人が訪れている。



代表作となった『サイボーグ009』
(株式会社石森プロ所蔵)

自問自答：
自分で問いを出して自分で答えること。

足を洗う：
今までの(よくない)仕事をきっぱりとやめること。

肩書き：
その人の職業や身分、地位など。

反響：
あることからの影響がほかのことにおよびること。

果敢：
決断力に富み物事を思いきつてするさま。

事象：
表面に現れた事から、現実の出来事。